

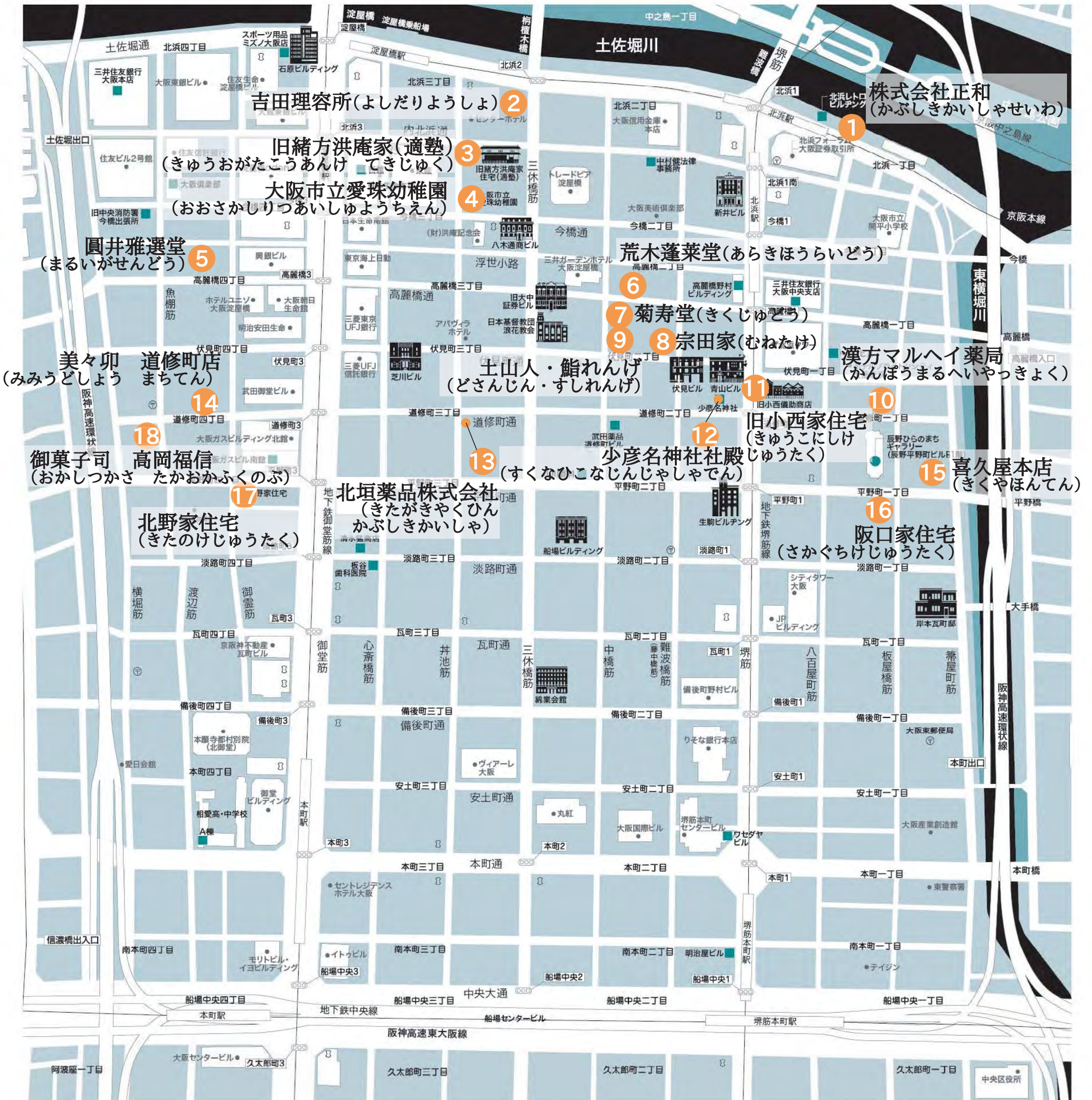


船場 ‘いま’ ‘むかし’ 展Vol.4

船場の木造建築展

～建物に込められた想いをつなぐ～

主催：船場地区HOPEゾーン協議会



【船場の木造建築に関連する用語の説明】

●つし2階建

「つし（厨子）」とは、元来「屋根裏」あるいは「もの入れ」を意味する。江戸時代には、通りを歩く武士を見下ろしてはならないことから、表側の二階の階高を低く抑えて「つし」としななければならなかった。近世の町家によくみられる形式。

●表屋造り(おもてやづくり)

町家を通り面した表棟と座敷・台所などがある奥棟に分けて建てる形式。大坂の町家の特徴で、船場地区に多くみられる。

●箱軒(はこのき)

大正末期に現れ、昭和初期に流行した形式で、2階の軒先を箱段状にし、防火のために銅板等で覆ったもの。

●平格子(ひらごうし)

柱間内につくられた格子の総称。

●出格子(でごうし)

柱間より外側に約30～45cm突き出してつくられた格子。

●卯建(うだつ)

1階もしくは2階の両側もしくは片側につけられた袖壁。

●大壁(おおかべ)

柱が表に現れない壁構造。

●真壁(しんかべ)

木造建築における伝統的構法で、壁を柱と柱の間におさめ、柱が外面に現れる壁。

●虫籠窓(むしこまど)

町家のつし2階に設けられている窓。漆喰塗りの縦格子がよくみられるデザインで、外枠が木瓜(もっこう)形<瓜を輪切りにした形、楕円形に近い>、長方形など時代によって形が異なる。

●棧瓦葺き(さんがわらぶき)

波形断面の棧瓦を用いて葺かれた屋根。17世紀後半に発明され、本瓦葺き(ほんがわらぶき)に比べて重量は約半分となった。

上) 虫籠窓
中) 棧瓦葺き
下) 一文字瓦

●一文字瓦(いちもんじがわら)

軒先の瓦の下端(したば)が一直線になるようにした瓦。

●切妻造り(きりつまづくり)

屋根形式のひとつで棟から両側に流れをもつもの。

●寄棟造り(よせむねづくり)

棟から四方に流れる屋根の形式。

●入母屋造り(いりもやづくり)

上部の切妻造りの形式とし、その四方に庇屋根をつけたもの。

●軒切(のきぎり)

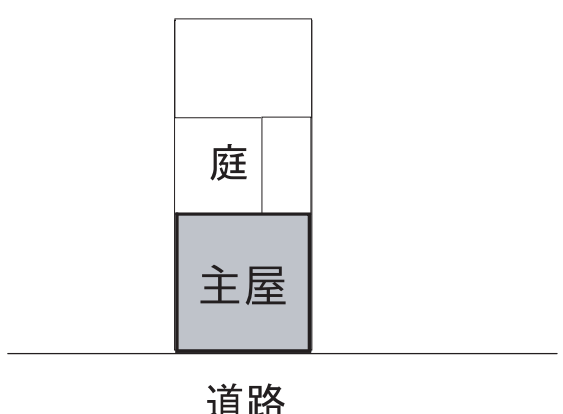
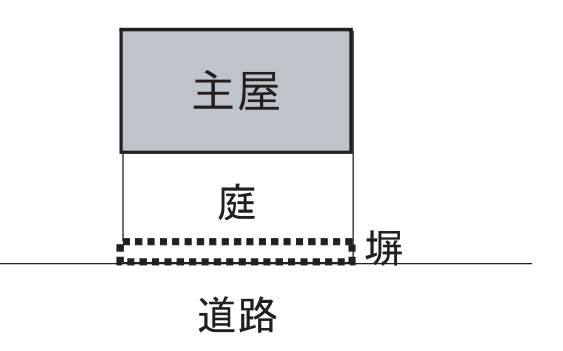
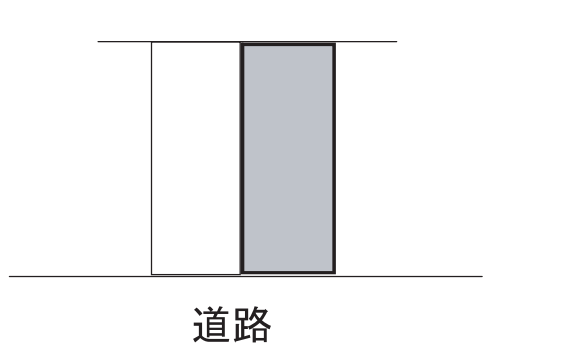
もともとは町家正面の一部を切り取って本来の道路幅員を回復するものであり、市電の敷設工事や都市計画にもとづく道路拡幅も軒切と総称される。明治の終わりから昭和にかけて大阪の通りで行われ、船場地区においても実施。これにより3階建や箱軒をもつ町家、洋風建築などが現れた。



船場地区の木造建築について

1. 船場地区の木造建築の分類

大きく、町家、長屋、その他(社寺・文教施設等)に分類できる。

種類	配置	基本形式及び特徴
町家(1棟1戸)	<p>①表屋造り(おもてやづくり)</p> <p>店舗部分の表棟と座敷・台所のある奥棟に分けて建てる形式。大阪の町家の特徴で、船場地区に多くみられる。奥棟の裏に蔵を有するものもある</p> 	<p>つし2階建 例 旧緒方洪庵家住宅(適塾)</p> <p>江戸末期頃からの古い形式</p> <p>表に面する2階は階高が低い</p> <p>つし2階</p> <p>船場地区にはほとんど残っていない</p>
		<p>2階建(本2階) 例 旧小西家住宅</p> <p>明治期以降の一般的な形式</p> <p>つし2階部分が居室に変わることによって2階の階高が高くなる</p>
		<p>箱軒形式 例 喜久屋本店</p> <p>昭和初期に流行した形式</p> <p>2階の軒先が箱段状になっている</p>
		<p>3階建 例 阪口家住宅、北野家住宅</p> <p>大正期から昭和初期(船場地区で軒切り《のきぎり》が行われた時期)に建てられた形式</p> <p>2階建町家の前面が切り取られ、床面積が減少するので、増床を目的として3階建町家を建てた</p>
	<p>②塀・庭付き戸建て型</p> 	<p>例 美々卯道修町店</p> <p>明治末期からみられる形式</p> <p>高塀が道路に面し、主屋は道路から後退する</p>
(1棟2戸以上)長屋		<p>2階建(本2階) 例 土山人・鯨れんげ</p> <p>明治以降の一般的な形式</p> <p>つし2階部分が居室に変わることによって2階の階高が高くなる</p>
		<p>箱軒タイプ 例 株式会社正和、吉田理容所</p> <p>昭和初期に流行した形式</p> <p>2階の軒先が箱段状になっている</p>
その他		<p>例 愛珠幼稚園、少彦名神社</p> <p>町家・長屋以外の形式をもつ木造建築</p>

II. 船場地区の木造建築の特徴

分布

・戦災を免れた平野町以北のエリアに、当初のかたちをよく残す伝統的な木造建築が多く分布する。

様式について

- ・船場の伝統的な木造建築は、町家・長屋が多くを占め、ともに近代以降に建てられた2階の階高の高いものが多い。平屋・つし2階建は少数である。
- ・数はそれほど多くはないが、御堂筋以西のエリアに、町家の一種である塀・庭付き戸建てが点在する。
- ・大正～昭和初期に船場地区で行われた軒切りと共に、3階建の町家が道修町・平野町を中心に建てられており、現在船場地区に3軒残る。

敷地・規模

- ・船場は、豊臣秀吉による大坂城築城にあわせて形成された市街地であり、大坂城に通じる東西の通りを軸に、通りを挟んだ両側町が形成された。今もその面影が残っており、伝統的な木造建築は東西の通りに正面を向けるものが多い。
- ・船場の街区は、東西・南北それぞれを40間(約80m)とし、街区の中央に東西に走る背割り下水を設けた。これにより、間口が狭く、奥行のある南北に細長い短冊型の宅地が形成された。近世以降に建てられた木造建築は、このような町割の上に建てられている。
- ・主に町家の宅地については、間口が3間(約5.4m)以上のものが多い。奥行は街区の半分程度まで至るものもある。こうした短冊型の宅地形状に合わせ、町家は表と奥の2つの棟に分けて建てられるようになった。これが、表屋造り(おもてやづくり)と呼ばれる形式で、表の店部分(表棟)と奥の座敷・台所部分(奥棟)に分かれ、両者は玄関で接続される。また通風や採光を配慮して、2つの棟の間や奥棟の裏には庭が配された。船場では、現在もこの形式の町家が多くみられる。

建物のかたち

- ・屋根は棧瓦葺き、平入りの切妻屋根が大半で、1階部分に庇がつく。
- ・町家・長屋は、2階の階高が高いものが多い。両脇もしくは片側に卯建(うだつ)が付くものが多い。

各部のつくり

(町家・長屋)

- ・1階壁面・庇：庇は和瓦葺き。玄関は、格子戸・板戸・ガラス戸などであり、当初のものから、使い勝手にあわせ改変されているものも多い。開口部は、建築年代の古いものは平格子(ひらごうし)や出格子(でごうし)、壁面は真壁(しんかべ)で、腰石(板)張りとしっくい壁が基本である。
- ・2階壁面：壁面は漆喰塗りの大壁(おおかべ)、虫籠窓(むしこまど)もしくは、ガラス窓に木・鋼製の面格子がつく形式が多い。例外として、宗田家は漆喰塗りの真壁(しんかべ)となっている。

(箱軒町家・長屋)

- ・1階壁面・庇：庇は和瓦葺き。1階部分が店舗等として改装されているものが多いが、元の姿をよく残す建築は、壁面は漆喰塗りのやタイル貼りとなっている。榊正和は、腰石張りの上に欄間付窓と、そこに鋼製面格子が入り当初の姿がよく残されている。
- ・2階壁面：壁面は漆喰塗りの、銅板張り、タイル張りなどである。開口部は改修されているものが多いが、木製の腰手すりがつくものもある。

(軒裏)

- ・町家・長屋ともに、漆喰で垂木や桁を塗込めたものや、軒先が箱段上になっている箱軒(はこのき)が多い。前者のほうが年代的には古く、北垣薬品や旧緒方洪庵家住宅の江戸末期頃の町家にもみられる。後者は昭和初期に流行したもので、銅板巻きや漆喰塗りのものがある。

(卯建)

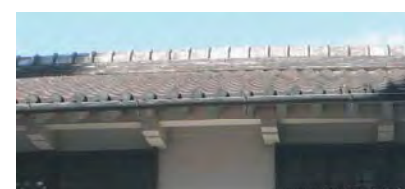
- ・建築年代の古いものは2階に漆喰塗りでつくられ、そのほか2階通しの屋根付のものや、銅板(どうばん)巻き・屋根卯建等もある。



左) 旧緒方洪庵家住宅の1階。壁面は真壁、腰板張り・白漆喰塗りで開口部は出格子がついている。
右) 旧小西家住宅の2階。壁面は大壁、白漆喰塗りでガラス窓に面格子が入る。



左) 榊正和の1階。当初の姿をよく残している。
右) 北野家住宅の3階。外壁はタイル張り、開口部には木製の腰手すりがつく。



垂木塗込



箱軒

左) つし2階部分の卯建
中) 屋根付き卯建
右) 屋根卯建





株式会社正和

NO. 1

所在地
中央区北浜1-1-2

用途
現在：事務所

建築年代
明治30年代
(1897~1907)

備考
設計者不詳

土佐堀川沿いの和洋折衷の長屋



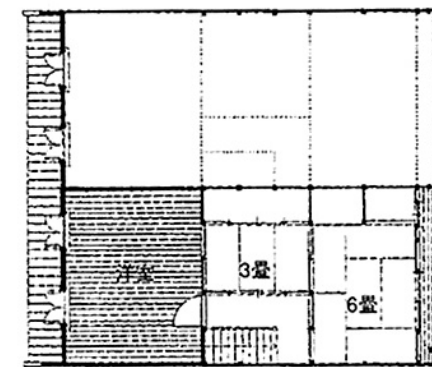
土佐堀通に面し、大阪証券取引所の北向いに位置する。船場地区において川沿いに建つ数少ない木造建築の一つ。2軒長屋で、正面の右側住戸が株式会社正和の事務所として利用されている。

間口5間、奥行5間半の長屋が1棟、棧瓦葺き、切妻平入りの2階建である。2階の階高が高く、軒裏は箱軒(はこのき)、建物両脇に卯建(うだつ)があり、近代の長屋の特徴を有する。通りから見ると2階建であるが、地上と川面とに高低差があり地階をもつ。

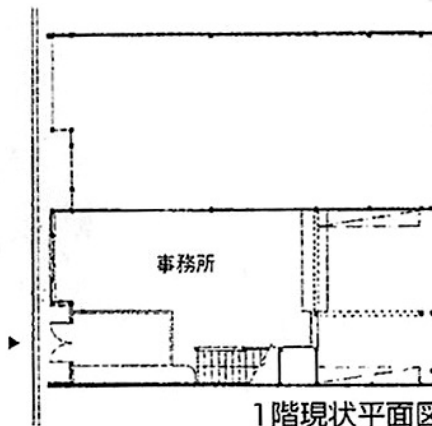
正和の1階は、玄関の両脇・上部にガラス入りの細長い小窓があり、さらに上部に三角形の妻壁であるペディメントがみられる。通り沿いの窓は外側に鉄格子、その内側に装飾のあるガラス戸が入っている。2階の開口部は観音開きで土蔵造りの形式をとっているが、内側には洋風の上げ下げ窓が入る。

通り側は和洋折衷の外観であるが、背面の土佐堀川の立面は和風の構えとなっている。

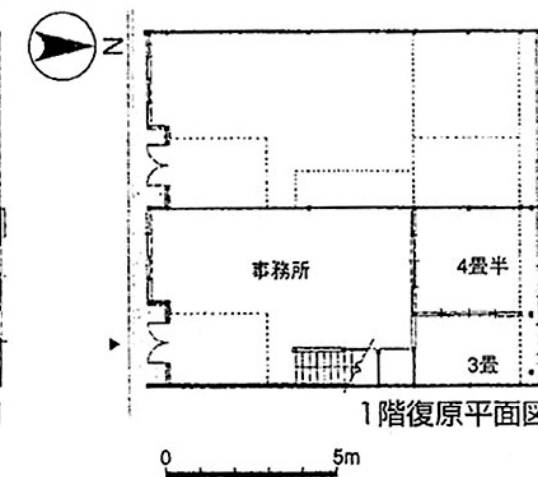
内部構成について



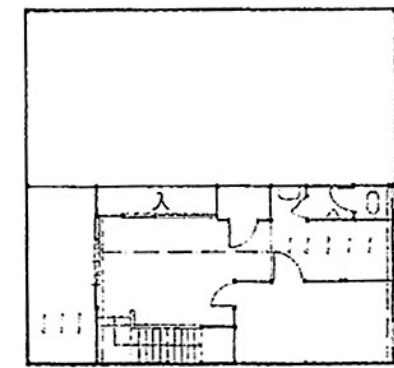
2階現状平面図



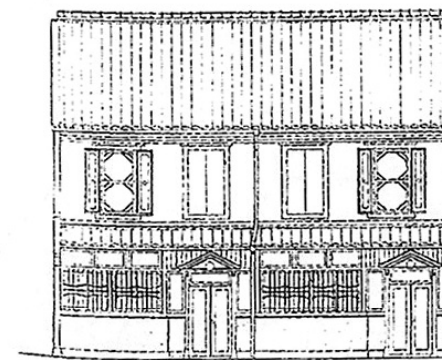
1階現状平面図



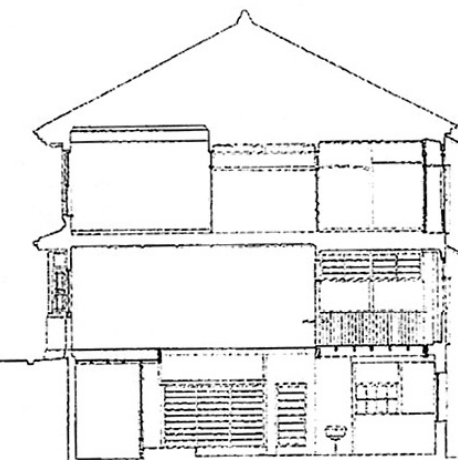
1階復原平面図



地階現状平面図



復原立面図



現状断面図

1階の通り側は洋風の事務室となっている。事務室奥は改装されているが、和室が2室あったとみられる。2階の通り側は洋室で、奥に和室が2室ある。

通り側からは2階建に見えるが、川と陸の高低差があるため、地下空間を有しており、台所・食堂・洗面所・便所・物置などの機能を集約している。

吉田理容所



NO.2

所在地
中央区北浜3-2-2

用途
現在：店舗
当初：住居

建築年代
昭和5年(1930)

備考
設計者不詳

建築当初の雰囲気の内外に残す長屋

船場地区と中之島とをつなぐ梅檀木(せんだんのき)橋から、三休橋筋を南下したすぐの場所に位置する。吉田理容所が店を構える。

昭和5年3月に大家である原弥兵衛氏が建築。現当主によると、当初は4軒長屋が3棟連なっていた。昔は真ん中の住戸は嫌われたため、偶数の4軒長屋になったとのことである。吉田理容所の入る住戸は住居として建てたものを、竣工後すぐに1階を理容所に改装した。

棟続きの住戸が並ぶ長屋の形式を維持しており、現在も5軒が残る。吉田理容所の住戸は間口約2間半、奥行6間である。棧瓦葺き、切妻平入りの2階建て、軒裏は箱軒(はこのき)となっている。外壁は1階はタイル貼りで元の姿を残している。

玄関上部の半月型の突き出し窓、玄関まわりの石貼りの

縁取り、玄関横の縦長の上下開閉窓等モダンなデザインが用いられている。一方2階の開口部には和風の手すりが付いている。



吉田金吾さん(当主)にお聞きしました！

好きなところ・自慢

初代以来つづく、ドイツ製の5枚の大鏡。子供の頃には指紋が付いたりするので触らせないように鏡の前には行くなと絶えず言われていました。

歴史やエピソード

- ・長屋新築後、5ヶ月かけて理容店に改装。天井を上げて、鏡を架けたました。
- ・鏡脇の瓶台は置くものが増えたため、開店後すぐに入れ替えました。
- ・平成11年(1999年)に改装した時に床がリノリウムだったものを開店当時のようにタイル張りに戻しました。昔は掃除で床に水で流した時に、玄関と裏の台所の方に自然に水がはけるように勾配をつけていました。
- ・店側の窓(鏡板ガラス)は上下開閉に重く滑車がついていました。現在は閉じたままにしています。

- ・ドア上の突き出し窓は風通しのため付いています。
- ・隣家とは物入れを隔てて接するよう工夫されています。

大変なこと

- ・阪神淡路大震災で内装の塗り壁にひびが入ったので、コーキング剤で補修して、ひびが広がらないようにしています。
- ・20~30年目に瓦屋根の吹き替えをしました。



上) 開店当初からのドイツ製の
大鏡と脇の瓶台
下) 通りに面した開口部から光
が店内に入ります

～吉田理容所発行のパンフレット～



淀屋橋北浜 土佐堀通三休橋筋南下ル 吉田理容所 ○六六三三二五四四

吉田理容所



大阪市中央区北浜3-2-2 TEL.06-6231-2544

営業
AM 8:30～PM 6:00
日曜、祝日、連休（年末除く）

ご予約
AM 8:30～AM 11:30 / 1時間区切
PM 1:00～PM 6:00 / 1時間区切
（土曜のみPM 5:00まで）

料金
理髪 4,500円

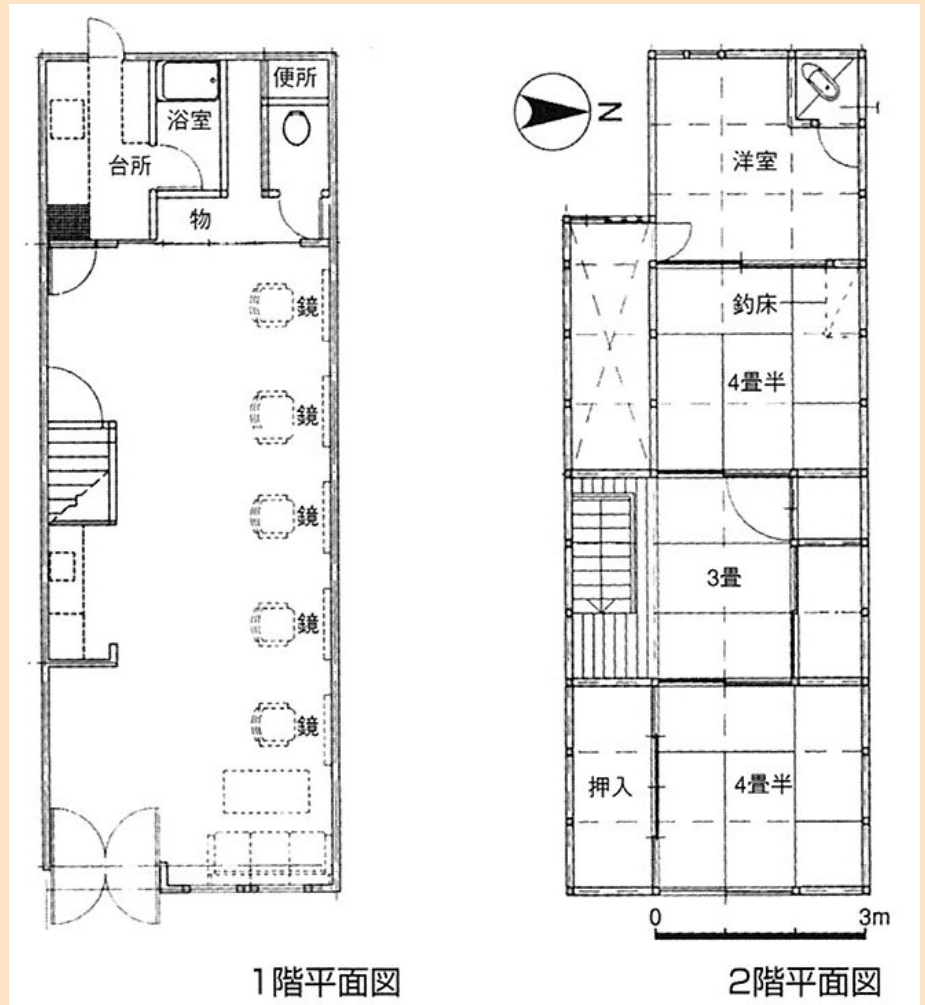


1930年ドイツに注文、縦180cm横90cmの鏡物鏡。横三尺六寸からサブロクの鏡と呼ばれる。



1999年に改装したシェンク・バーン 開業当時のスツールと従業員用の椅子

～平面図～



1階平面図

2階平面図

出典：大阪府の近代和風建築
（大阪府教育委員会/平成12年）

いらつしやいませ。
ありがとうございます。
吉田理容所でございます。
創業以来、北浜の地で
水くご愛顧を賜っております。
古き良き時代の空気と
心地よい音楽をお楽しみ頂きながら、
50分余りですがお寛ぎの時間を
お過ごしくださいませ。

歌舞伎義太夫 竹本莨太夫様

散髪 吉田理容所

ヘアースタッフのひとり(随想より)

「舞臺人たるもの、髪型はまことに大事にしなければいけない」とは入門いたしましたおりに師匠方から言われました。私は以前は長めにたてておりましたが、刈り上げた爽快感を味わいたしまして、少し伸びてまいりますとおちつかなくなり、散髪にまいります。散髪をお願いするお店を決めておりました。東京では旧・銀座東急ホテル裏通りの「よこたえん」大阪では北浜三目的「吉田理容所」さんにお断りしております。今月は大阪に滞在いたしておりますので、吉田さんに出かけました。

吉田さんは新聞、雑誌、テレビなどで取り上げられることの多い老練で、私も雑誌「フルタイム」で知りまして、しかも、わざわざ出かけていったのではなく、10年前、横方洪庵先生の史跡「道塾」を見学に行きましたときに、たまたま前を通り「よこたえん」と思ひ飛び込みました。お断りいたしました。当時は先代さんと當代、従業員さんの3人でなす。お断りいただきました。先代さんのお断りでしたが、1999年に當代がおひりでがんばっております。1930(昭和5)年間業の店内には大きな鏡が取り付けられております。当時のサラリーマンの切手箱を飾る鏡だ。そのうち、見事なものです。朝夕、ちり屋に上げられ、威容を誇っております。

顧客も北浜の舞臺人、料理店、経営者など、いろいろな層が多く、歌舞伎では15代目羽左衛門、6代目五郎、13代目左衛門、といった面々が大阪にみえるおとおいで、なんぞさうです。文楽では4代目結路大夫、5代目



吉田理容所オリジナルのヘアースタッフ、ワイヤーにアルテックのスピーカー



旧緒方洪庵家住宅(適塾)

NO.3

所在地

中央区北浜3-3-8

用途

現在：展示・見学施設
当初：住居、学塾

建築年代

江戸末期
(1830~1867)

備考

設計者不詳、
史跡、国指定重要文化財

江戸時代末期の代表的な大坂の町家で、 わが国で唯一の蘭学塾の遺構

淀屋橋駅に近い北浜通に面して建つ。

天保9年、緒方洪庵が蘭学の塾を開き人材を養成した場所として知られる。建物は、洪庵が購入する以前は大坂の富商「天王寺屋五兵衛」の分家で天王寺屋忠兵衛の持家であったとされる。

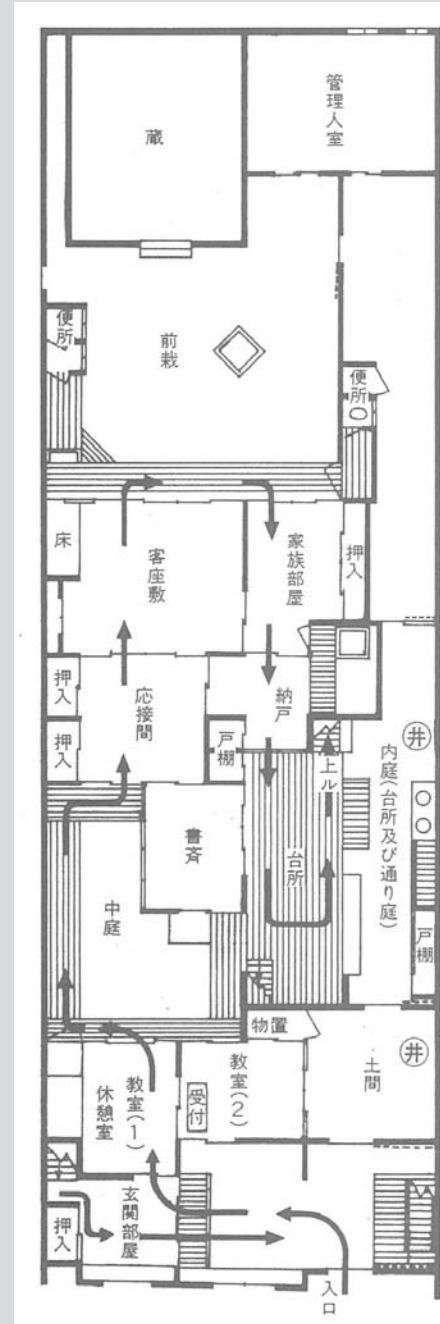
適塾閉鎖以降、間取り・間仕切りなどに大幅な変更が加えられていたが、昭和51～55年に解体修復工事が行われ、現在は往時の姿に近い形に復元されている。

主屋の背後に居住棟を配した表屋造り（おもてやづくり）で、敷地南に蔵と納屋をもつ。棧瓦葺き、切妻平入り、つし2階建である。2階部分の両側に卯建（うだつ）が付く。

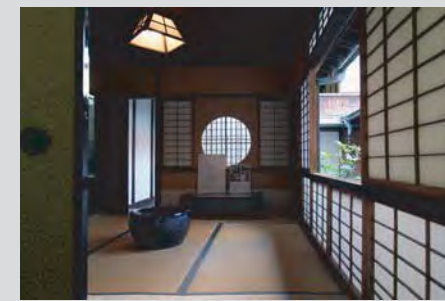
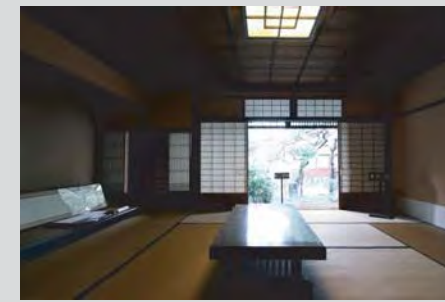
外観は白漆喰（しっくい）塗りの大壁（おおかべ）で、1階は間隔の狭い繊細な出格子が正面左側に連続する。2階は階高が低いつし2階で、虫籠窓（むしこまど）となっており、近世の町家の特徴を有する。



平面図と内部



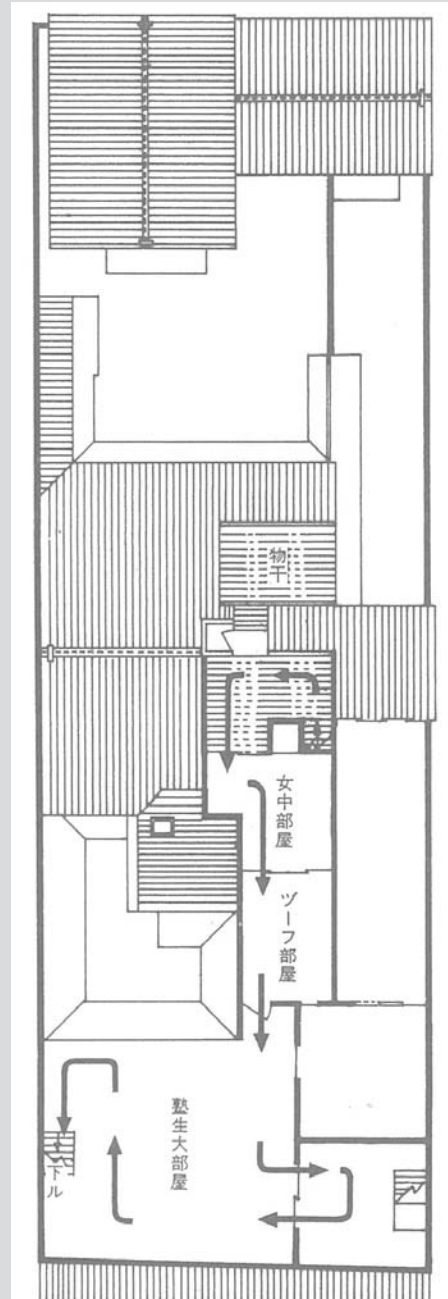
1階



左上) 敷地奥の前栽
左中) 客座敷
左下) 書斎
右) 内庭(台所及び通り庭)

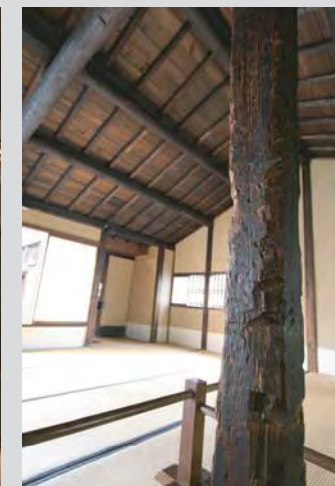
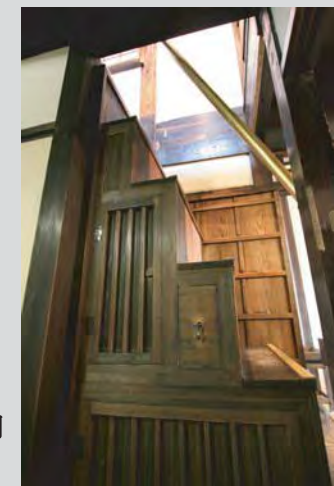


2階



奥行が街区の半分程度にまで達する細長い敷地。通風や採光を考え、通りに面した表の棟と座敷のある奥の棟の前後には庭が配置されており、土間や内庭もその役割を果たしている。

左) 2階の塾生大部屋。柱に刀傷が多数残る。
右) 台所から2階に上がる箱階段。階段の下は引き出しや戸棚などの収納空間となっている。





大阪市立愛珠幼稚園

NO.4

所在地
中央区今橋3-1-11

用途
現在・当初
：幼稚園

建築年代
明治34年(1901)

備考
設計原案：伏見柳 設計指導：久留正道
実施設計：中村竹松 施工：大阪土木株式会社
国指定重要文化財

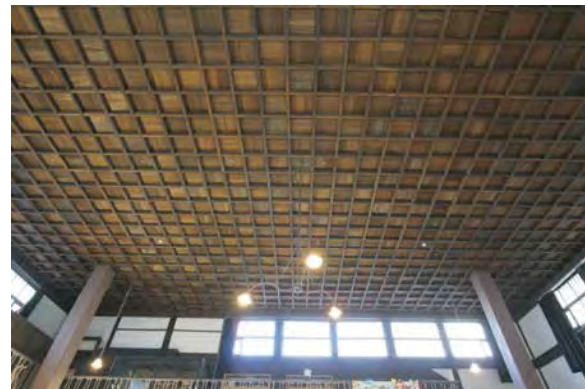
船場の人々の教育にかける 心意気を伝える木造幼稚園舎

今橋通と井池(どぶいけ)筋の交差点に位置する。

創立は明治13年であるが、同34年に旧緒方洪庵家住宅(適塾)西側の当地に移転した。創設者は船場北部(平野町以北)の連合町会で、まさに船場の人々の教育にかける心意気を伝える幼稚園といえる。

今橋通から北浜通に至る南北に奥行のある敷地の周囲に瓦葺きの高塀をめぐらせ、南正面には格式の高い塀重門(へいじゅうもん)を構える。前庭を挟み、入母屋造り(いりもやづくり)平屋建御殿風の玄関棟、入母屋造り2階建の遊戯室棟、その奥には園庭を囲むように西側と北側に寄棟造り(よせむねづくり)平屋建の事務室・保育室棟、北西隅に鉄筋コンクリート造2階建の資料室、東側に寄棟造りの家庭室が配置されている。

特徴的なのは遊戯室で、入母屋造(いりもやづくり)棧瓦葺き2階建で内部を吹き抜けとしている。



左) 南側正面玄関の様子。堂々とした御殿風の外観。門の両側には泰山木とざくろが植えられている。
右) 遊戯室の天井。格天井という格式高いもので、中央に繊細なデザインのシャンデリアが吊るされている。

山口園長にお聞きしました！

◆好きなところ・自慢

なんといっても、木造であること！あたたかさを感じるし、子どもが転んでも痛くない。また、音を吸収してくれる。

建設当時の主席保母である伏見柳が設計に携わっているので、

*床が2重になっていて、下にオガ屑が敷き詰められているので、防音や防湿に配慮

*天井が高く3面から光を取り入れられる遊戯室はとても明るい

*園庭に出る扉には段差がなく、当時からバリアフリー化していた

など、幼稚園としてよく考えられている。

◆歴史やエピソード

戦時中、職員が飛んでくる火の粉を消すなど命がけで幼稚園を守ったと聞いている。だからこそ、貴重な資料が守られ、今に受け継がれている。

また、大正時代から幼児劇や大型積木での遊びを取り入れるなど、最先端の教育が行われていた。

◆大変なこと

平成に入り一時期園児が少なくなったため、文化施設にする案も出たようだが、幼稚園として、この場所にあるからこそ価値がある。守っていくこと、次につなげていくことは大変なことである。

～愛珠幼稚園の歴史を伝えるものたち～



遊戯室の名品たち。大切に使用されているオルガンと、建設当初から時を刻み続ける時計。



園庭にそびえる高さ3.8mの重要文化財・廻旋滑り台。昭和6年に設置され、現在でも子どもたちの人気の遊具。



茶室から庭をみる。本格的な茶室で、子どもたちのお茶会が開かれている。庭の柿の実は、毎年子どもたちと一緒に収穫している。

開園当初からの愛珠幼稚園の図書・教材・教具・器具類の一例
(幼稚園要覧より抜粋)



恩物

貝合わせ

二十遊嬉の材料
箸・鑲・組紙・組板など

六球・三躰・積木・置板・置箸・置鑲



圓井雅選堂

NO.5

所在地
中央区高麗橋4-4-21

用途
現在・当初：住居

建築年代
明治末期～大正初期

備考
設計者不詳

船場の文化を伝える町家

船場地区の西部、周辺に高層ビルが建ち並ぶ中に浮世小路に面して佇む塀付の町家。

現当主によると、建築は明治末～大正はじめと推測され、当初は船場の実業家であるとともに数奇者でもあった山口玄洞氏の持ち家だったが、戦後昭和20年代のはじめに圓井家が譲り受け、現在に至る。

通りからは窺うことはできないが、主屋の裏に中庭そして蔵がある。主屋は棧瓦葺きのむくり屋根で庇(ひさし)は一文字瓦、切妻平入りの2階建。2階の両脇に重厚な卯建(うだつ)が付いている。主屋と連なる塀は真壁(しんかべ)、杉板張りである。

1階はガラス入りの玄関扉、ショーウィンドウに改装されており、明るい印象である。2階には細い格子の入った虫籠窓(むしこまど)、塀の前面に犬矢来が設置されている。



圓井謙三郎さんにお聞きしました！

古美術商を営んでおり、自宅も兼ねています。裏の土蔵は現役で活躍してくれています。

好きなところ・自慢

外観の佇まいや座敷から中庭にかけての雰囲気、「ビルの谷間にいることを忘れさせる落ち着いた空間」とお客様から言われることがあります。



歴史やエピソード

- ・中庭を囲む廊下にも障子欄間があります。
- ・住所表記は「高麗橋」ですが、ご案内のとおり、この建物は「浮世小路」に面しています。日常生活に必要な商店のほか、船場旦那衆の隠れ家もあったと言われています。

大変なこと

・慣れましたが、建物の中には一日中直接陽がささないので、常に電気を付けています。

また、窓が少なく外が見えないこと、窓があっても周囲をビルに取り囲まれているため、周囲から見られているような感じがすることも、慣れたとはいえ大変なところでしょうか。

・今は地域の皆さんのお陰で殆どなくなりましたが、一時は無断駐輪がひどくて困りました。花の鉢植えは最初は無断駐輪対策で始めたものです。



荒木蓬菜堂

No. 6

所在地
中央区高麗橋
2-4-12

用途
現在：店舗、作業場
当初：店舗、事務所、住居

建築年代
昭和21年(1946)

備考
設計者不詳

創業130年余 結納用品を扱う船場の老舗が店を構える木造建築

高麗橋通に北側に位置する。明治八年の創業、儀式・儀礼にかかわる品物の販売と、関連するしきたり・作法についての情報提供を行う「荒木蓬萊堂」の店舗兼作業場となっている。現当主によると、当初は曾根崎に店を構えていたが、曾根崎で起こった火災で被害に遭い、当地に移ってきたとのことである。現在の建物は、戦後すぐに建築したものである。

主屋の裏には平屋建の棟がある。主屋は棧瓦葺き、切妻平入りの2階建。1階庇から2階にかけて卯建(うだつ)が立ち上がる。

主屋は、1階の出入口はガラスの引き戸で、その脇にガラス張りの出窓が付いており、婚礼用品を飾っている。出入口上部には屋号を記した木製看板が飾られている。2階はせいが高く、虫籠窓(むしこまど)のデザインが用いられている。



荒木隆弘さん(当主)にお聞きしました！

◆歴史やエピソード

建てた当初は、店舗、事務所であると共に2階で家族が居住していた。

◆大変なこと

風雨、地震等への対応、維持管理。



左) 1階部分。玄関は1枚もののガラスが入った引き違い戸。ガラス張りの出窓がショーケースとなっている。
右上) 2階には大きな虫籠窓がつき、両側に卯建が立ち上がる。特徴のある構え。
右下) 内部の棚に飾られた結納用品の数々。



菊寿堂



NO. 7

所在地
中央区高麗橋2-3-1

用途
現在：店舗

建築年代
明治末頃

備考
設計者不詳

看板のない老舗和菓子店の木造建築

江戸時代、大店が並び、大坂城へ繋がる主要な通りであった高麗橋通から南に下ったビルの並びにある木造建築。店を構えるのは創業天保年間の老舗和菓子店「菊寿堂義信(きくじゅどうよしのぶ)」で、昭和20年4月より当地に移った。

建物の側面形状から、かつては長屋であったとみられるが、現在は本建物1戸である。屋根は棧瓦で、庇(ひさし)は一文字瓦を葺いている。切妻平入りの2階建。軒裏は銅板巻き、庇は漆喰(しっくい)塗りの箱軒(はこのき)であり、2階には銅版巻きの卯建(うだつ)が付いている。2階外壁はレンガ色のタイル貼り、窓まわりは銅板巻でかつての姿をよく残しているといえる。



久保昌也さんにお聞きしました！

◆好きなところ・自慢

戦前の建築物で、空襲の被害からまぬがれたこと。

◆歴史やエピソード

- ・かつては文楽、歌舞伎の方々とのつながりも多かった。
- ・菊寿堂と墨で書かれたものは、有名な義太夫によるもの。



◆子どもの頃の思い出

店と住居が一緒であったことで祖父の仕事を見たり手伝ったりしていた。近所に子供達も大勢いて、今とは違う生活感があった。

◆大変なこと

補修、修理を必要とする所が多い。仕事は休めないし・・・阪神大震災時にもゆがんだ所ができた。



宗田家

NO. 8

所在地
中央区伏見町2-4-4

用途
現在：住居兼事務所
当初：住居

建築年代
大正13年(1924)

備考
施工：布山工務店

4世代に渡る 船場での生活を伝える町家

伏見町通に建つ木造建築。大正13年に現当主の祖父宗田治三郎氏が建て、以降4世代にわたり居住する。現在、玄関付近を一部会社事務所として使用している。

主屋の裏に坪庭、蔵がある。主屋は棧瓦葺き、切妻平入りの2階建。主屋の脇に庇(ひさし)上までの高さのある幅の短い塀が付いている。

船場に残る多くの町家と異なり、正面2階の壁が真壁(しんかべ)で軒裏には漆喰(しっくい)が塗られていない。京町家と類似する特徴をもつ。

当敷地は、隣接する北側の敷地との間に1mほどの幅をもった空地があり太閤下水の名残がみられる。



住吉淳伍さん(宗田ビル(株)代表取締役)にお聞きしました！

◆好きなおところ・自慢

- ・玄関を開けると、外壁が桧皮貼りの内玄関がある。
- ・1,2階の座敷は東側に床の間、違い棚を配し、小さな庭と大平八郎の乱を生き抜いた蔵が残り、往時へタイムスリップできる。



◆歴史やエピソード

本家は道修町2丁(神農さん西側)で、和漢薬卸商を営んでいた。分家として明治41年道修町2丁目に宗田ゴムを設立。その居宅として大正13年に伏見町2丁目に木造2階建居宅を新築、現在に至る。業種も変わり、現在不動産業を営んでいる。

◆子どもの頃の思い出など

台所の天井が「明かり採り」のガラスになっている為、子どもの頃友人がその上に乗るのを怖がっていた。ガラスは潜水艦に使用されていたものと同じと聞いている。

◆大変なこと

地震の被害のニュースを見る度に、この家の基礎はレンガで出来ているので不安になる。柱や梁は太いので、少々は大丈夫と聞いてはいるがやはり心配。



土山人・鯨れんげ

No.9

所在地
中央区伏見町2-4-9, 10

用途
現在：店舗

建築年代
大正末期

備考
設計者不詳

歴代船場のこだわりの名店が 暖簾をあげる長屋

伏見町通に面する角地に位置する木造建築。
自家製粉石臼挽き手打ち蕎麦の「土山人(どさんじん)」と
繊細な江戸前寿司を提供する「鮎れんげ」が店を構える。

現在は3軒長屋で、上記の店舗が西側と真ん中の住戸に
入る。屋根は棧瓦葺きで西隅に残る庇(ひさし)は一文字
瓦(いちもんじがわら)葺き、切妻平入り、2階建である。
外観は、1階は店舗の雰囲気に合わせて改装されているが、
漆喰(しっくい)で塗りこめた軒裏、大屋根妻壁部分など
がかつての姿を留めている。2階の開口部には格子が入
り、伝統的な木造建築の意匠を受け継いでいる。
南東角の屋根上の鬼瓦が建物のアクセントとなっている。



井上哲朗(株)モアイ代表取締役さんにお聞きしました！

◆好きなところ・自慢

「土山人」の玄関はいつてすぐの敷石と小
あがりのある小部屋、2階にあがる階段。
「鮎れんげ」の2階にある天窗。



◆歴史やエピソード

大正時代末期建築の木造2階建ての連棟。
昭和7年から平成12年頃まで船場の名店
「天金」が営業していた。



上) 土山人の内部の敷石と小部屋
下) 土山人の内部 2階へ上がる階
段。2階の壁に小窓がついている。

◆大変なこと

木造建築なので、白ありや害虫の被害が多いこと。

◆建物に入居された理由

古き良き船場のイメージが残っている現存する数少ない建物
と思ったため。

◆建物への思い

姿を消しつつある市内の木造家屋
なのでその姿を可能な限り残した
いと思います。

土山人の店舗に入ってすぐの床面。
焼き物を割って埋め込んでいる。





漢方マルヘイ薬局

No. 10

所在地
中央区道修町1-5-4

用途
現在：店舗

建築年代
不詳

備考
設計者不詳

看板が目印 地域に親しまれる 道修町の漢方薬局店

船場地区の東部、道修町通の角地に位置する。看板が目を引く漢方薬局店。くすりのまちである道修町を特徴づける伝統的な木造建築の一つである。

昭和58年に内装・外観を全面的に改修し薬局として利用を開始。西側の隣地には数年前まで近代建築の印度ビルが建っていた。

現在は主屋の町家一棟のみであるが、主屋の裏手に蔵等があったことが開店当初の写真から確認できる。現在は会社の事務所ビルに建替えられている。

棧瓦葺き、切妻平入り、2階建て、2階の西脇に卯建(うだつ)が付いている。

1階は店舗として改装されているが、2階の鉄格子の入った虫籠窓(むしこまど)や漆喰(しっくい)で塗りこめた軒裏など近代の町家の特徴をよく残す建築である。



薬局長丸山運平さんにお聞きしました！

◆好きなところ・自慢

くすりのまちとして歴史のある道修町で伝統的な漢方薬を扱えること、また、戦前からの歴史ある建物であることに満足している。

◆歴史やエピソード

- ・S58.9改装（それまでは小売部門としての店はなかった）
- ・S59.1漢方マルヘイ薬局スタート
- ・当建物は道修町資料館の地図に載っている。先々代は井上喜商店という屋号だった。現在は新和物産(株)である
- ・薬局をする以前は薬の容器屋だったと聞いている

◆大変なこと

- ・物の老朽化で、改装等に費用がかかること。



左) 改装前の建物。奥に蔵が見える。

右) 改装後、マルヘイ薬局の様子。隣は取り壊された近代建築の印度ビル。

旧小西家住宅



NO. 11

所在地
中央区道修町
1-6-10

用途
現在：事務所
当初：住居・店舗
事務所

建築年代
主屋：
明治36年(1903)

備考
設計者不詳
国指定重要文化財 国登録有形文化財
大阪市都市景観資源

都心部に残る近代大阪の町家を 集大成した木造建築

道修町通と堺筋の交差点に位置する、船場を代表する大規模な木造建築。

コニシ株式会社は初代小西儀助が安政3年に京都より大阪に出、明治7年に薬種商を創業したことにはじまる。2代目儀助は、道修町堺筋の北東角、当時伏見町まで達する約300坪の地所を購入し、3年をかけて新しい住居を建設した。これが現在の建物であるが、明治45年の堺筋の拡幅に伴い堺筋部分は軒切(のきぎり)され縮小している。道修町通に南面して建つ主屋は、店舗の表屋と奥の居室部からなる表屋造り(おもてやづくり)である。主屋裏には中庭を囲んで蔵(衣装蔵・二階蔵)が配置されている。明治末期の大店の屋敷形式を留めている。

主屋は棧瓦葺き、庇(ひさし)は一文字瓦で、入母屋造り(いりもやづくり)平入りの2階建である。外壁は主屋正面が白漆喰塗り、堺筋側は黒漆喰(しっくい)塗りと異なる。東側には地上から大屋根の高さまで卯建(うだつ)が立ち上がっている。

1階は玄関から西側に繊細な木格子が連続し、2階の開口部に鉄格子が入る。

小西哲夫さん(コニシ(株)取締役)にお聞きしました!

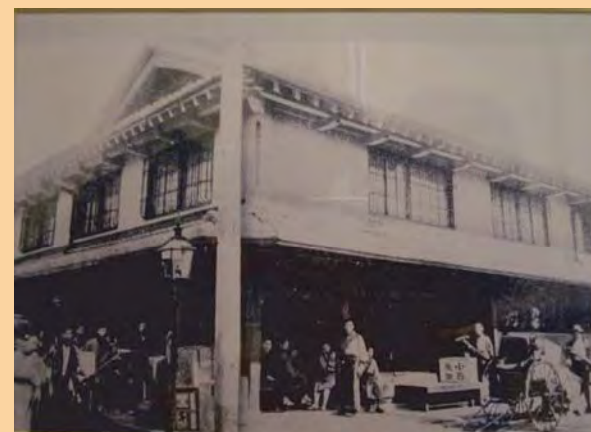
◆歴史やエピソード

- ・昔は井戸でスイカを冷やして食べていた。
- ・隣の三越で友達とよく遊んだ。
- ・蔵の中で卓球していた。
- ・建物全体がみんなの遊び場だった。
- ・お手伝いさんがいて、土間でご飯を作っていた。
- ・2階のベランダで、野菜や花を作っていた。
- ・1日1回は掃除をしていた。米ぬかを使った。
- ・住んでいるころ、寝ていたのは2階だった。
- ・神農祭のときは、みんなで集まってお酒を飲んだ。



上) 敷地全景 下) 中庭の様子

～昔の写真(提供：小西哲夫氏)～

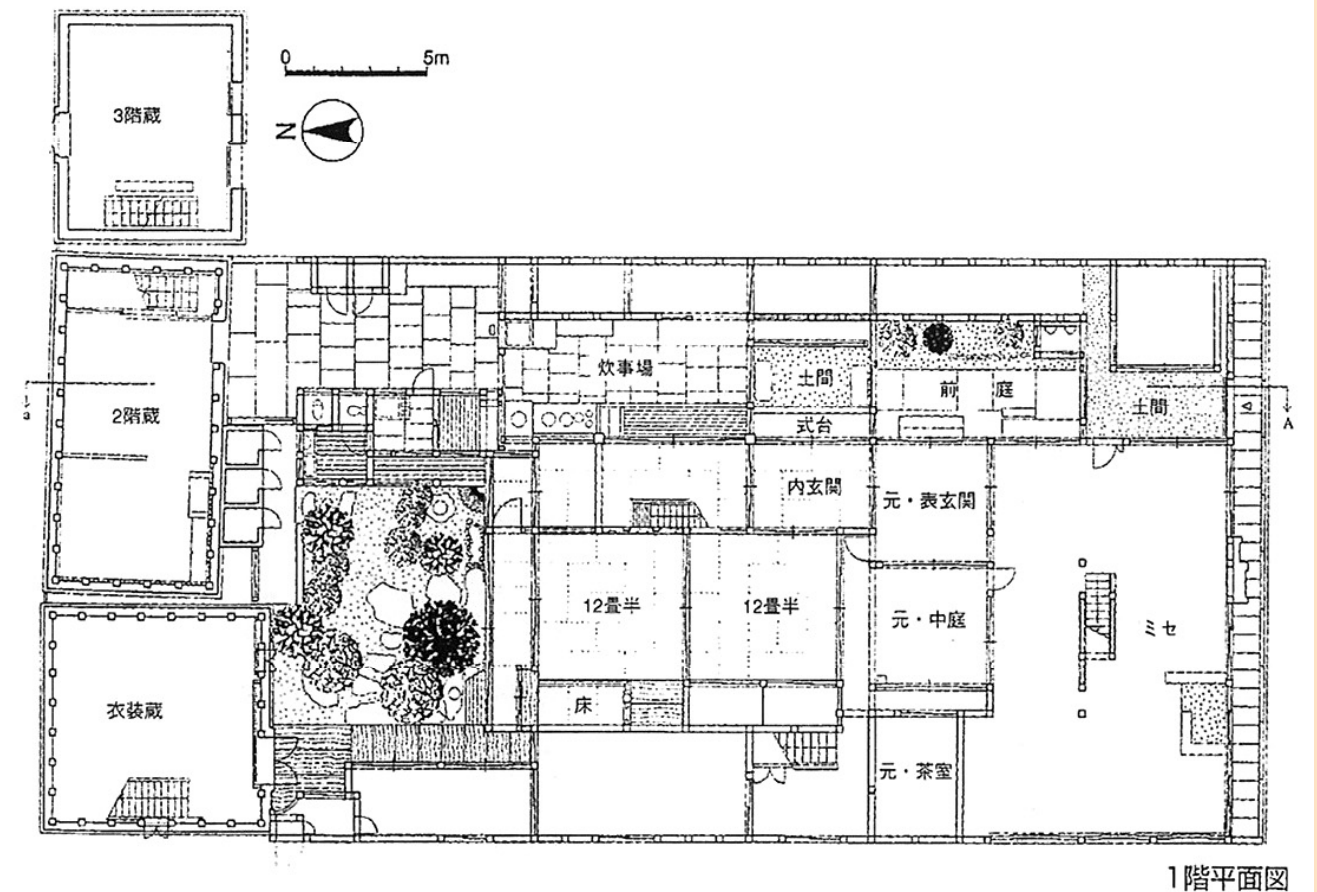
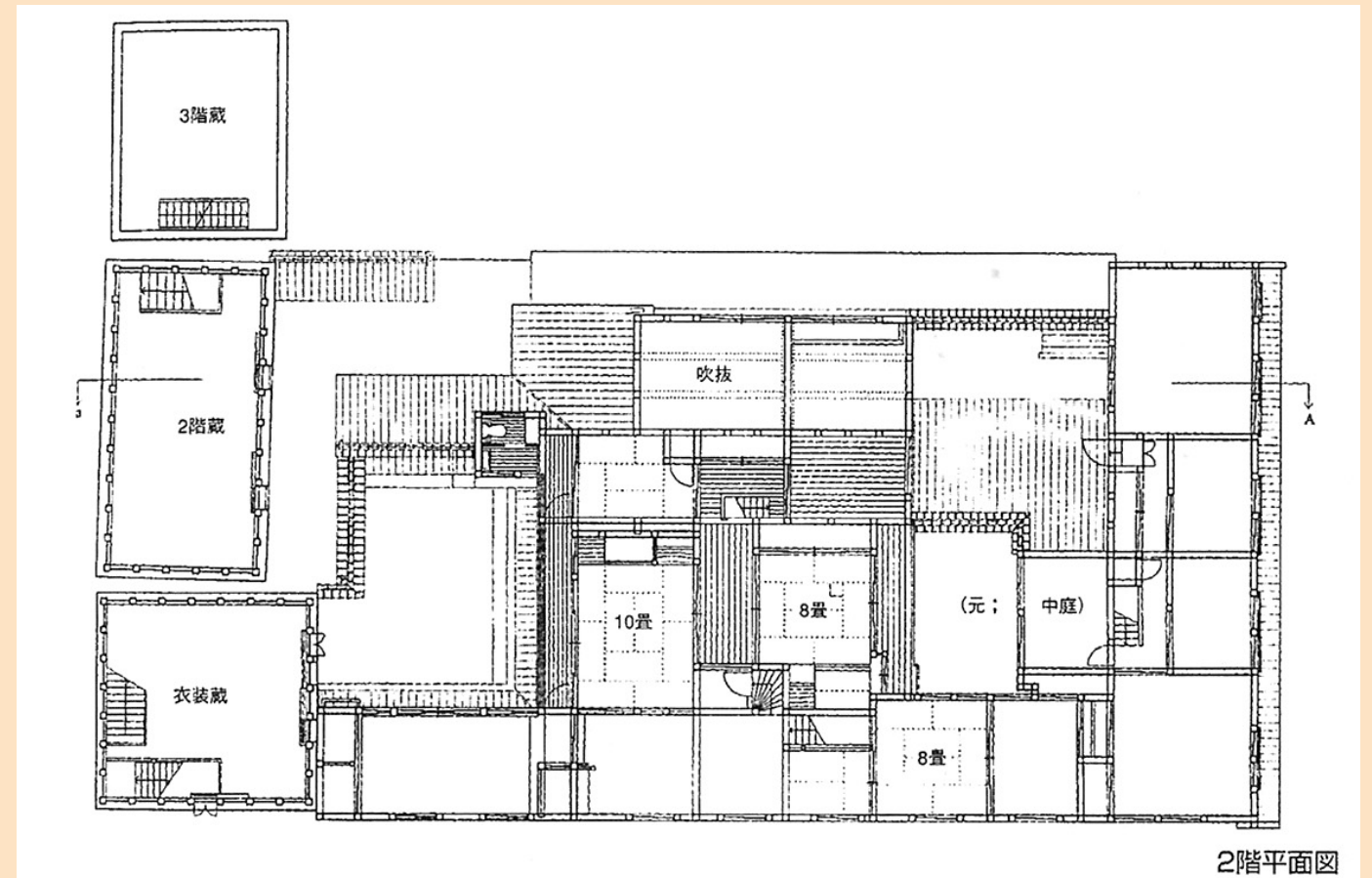


左上) 明治中期の小西儀助商店。堺筋は1912年(明治45)に大阪市電の経路として、約6mから12間(約21.8m)に拡幅されたがそれ以前の姿。
右) 大正初期、道路拡幅後の姿。
左下) 明治30年代のお正月の様子。

～旧小西儀助商店の変遷～

出典：大阪府の近代和風建築（大阪府教育委員会/平成12年）

- 敷地内には道修町通に面して、木造瓦葺3階建の住宅とその東側に木造瓦葺2階建の納屋、堺筋に面して木造瓦葺2階建の住宅、北側伏見通に面して木造瓦葺2階建の倉庫(土蔵)と平屋の納屋が1棟、そして主屋の裏に木造瓦葺平屋の湯殿が建てられた。
- 道修町通に面した店舗棟は、東半分が食料品、西半分が薬品部で、薬品部は堺筋側でも店売りができるようにになっていた。店舗東部分が玄関で、土間が続き奥は居住棟となっていた。
- 1階の居室は、内玄関、仏間、座敷、台所などからなり、2階は表と奥の座敷、そして3階にも座敷が設けられた。居室の畳数は313畳、電灯は30ヶ所、水道は5～6ヶ所もあった。
- 明治44年の堺筋の拡幅により、主屋は間口3間分が削り取られた。それに伴い伏見通との角地に3階蔵を新築。さらに関東大震災後に地震に弱いとの理由で主屋3階が撤去され、ほぼ現在のような外観となった。



■ 平面図(現在)



No. 12

所在地
中央区道修町
2-1-8

用途
現在: 宗教施設
当初: 宗教施設、
業界団体事務所

建築年代
明治43年(1910)

備考
設計者: 岡村富蔵
国登録有形文化財(本殿・幣殿・拝殿)

都心ビジネス街に楠の大木と共に佇む 築100年の貴重な木造神社建築

江戸時代以来薬問屋が集中し、全国への薬種流通の中心であった歴史ある道修町に位置する。

少彦名神社は安永9年に京都五條天神社から医薬の神である「少彦名命（すくなひこなのみこと）」を迎え、「神農炎帝王（しんのうえんてい）」とともに祀ったのが始まりとされる。

現在の社殿は明治43年に再建されたもので、本殿・拝殿はこの時の建物である。

拝殿と本殿の間に幣殿を付けた権現造様の形態をとる。日常的に参拝者が目にするのは拝殿であり、銅板葺き、入母屋造り(いりもやづくり)の建物で、正面中央1間分に千鳥破風(ちどりはふ)・軒唐破風(のきからはふ)が付く。

毎年11月22、23日は例祭「神農祭」が行われ、道修町周辺は、厄除けの笹に付いた「張子の虎」をもった人々で賑わい、この季節の船場の風物詩となっている。

別所俊顕さん(宮司)にお聞きしました！

◆好きなところ・自慢

- ・大阪市内ビジネス街に残る貴重な木造建造物及び境内楠の大木2本。
- ・平成12年12月4日付で登録文化財になった。



◆歴史やエピソード

- ・江戸から明治になり新政府は全国の小規模神社の整理を行ったが、当社もそれにあてはまり、付近の他社に合祀しよう大阪府から指導されたが、当時の道修町の人々が資金を出して現在の社殿を建てた。
- ・建設費は当時15,000円であった。

◆子どもの頃の思い出など

昭和55年まで境内に井戸があったが、地下鉄堺筋線の工事で水脈が絶たれ井戸の使用ができなくなった。



左) 毎月23日に行われるお湯神楽の様子。罪や汚れを払う。

中) 11月22、23日の神農祭の様子。

右) 堺筋アメニティ・ソサエティ主催の街角コンサート様子。



NO. 13

所在地
中央区道修町3-2-5

用途
現在：動物医薬品卸業
当初：医薬品卸業

建築年代
文政11年(1828)

備考
設計者不詳

北垣薬品さんにお聞きしました！

くすりの道修町の歴史を伝える 江戸末期の木造建築

道修町通と井池(どぶいけ)筋の角地に位置する。動物医薬品卸売業の北垣薬品の事務所である。船場地区において最も古い木造建築の一つである。

主屋の裏手に庭を挟んで土蔵が2棟配置されている。主屋は大正時代に軒切(のきぎり)され、現在の建物のかたちとなった。棧瓦葺き、切妻平入り、2階建である。1階開口部には鉄格子が入り、外壁下部は石張りである。2階の開口部は改修されているが、虫籠窓(むしこまど)や木製格子風のデザインとされており、伝統的な木造建築の維持への配慮が感じられる。軒裏は垂木、桁を漆喰(しっくい)で塗り込めている。



◆好きなおところ・自慢

- ・家の玄関の扉が二段階にして開ける(見知らぬ人等が急に入ってこられないように)。
- ・家の奥にある風通しがよい前栽、植木を眺めたりできる事。

◆歴史やエピソード

創業は宝暦13年(1763年)、和歌山県の妻というところから道修町3丁目に移り住む。それから文政11年(1827年)に井池筋の角に移り現在に至る。以後戦災にも遭わず泥棒にも入られたことがなかった(古い扉のお陰か)と聞いております。

◆子どもの頃の思い出など

- ・楽しかったことは、物干しが二階の大屋根の上に造られていたので、のぼって四方が見れたこと。(今は高いビルがあり見晴らしはよくない)夜はお月見等できました。
- ・嫌だったことは、家の中で遊ぶことができなかったこと。もっと広い家に住みたいと思いました。
- ・少し成長して聞いた話ですが、店が倒産した時等のため、家賃が入ってくるよう家主は家の周りに借家を持っていたとのこと。

◆建物への思い

- ・昔は間口だけの大小同じような家が建ち並んでいたのが、だんだん昔の建物がビル化され少なくなり、何かしら取り残されたような寂しい気がします。ただ今後残していきたいと念じております。



美々卵 道修町店

NO. 14

所在地
中央区道修町4-4-6

用途
現在：店舗
当初：住居

建築年代
戦前

備考
設計者不詳

老舗料亭「耳卯楼」を受け継ぐ船場の名店が店を構える木造建築

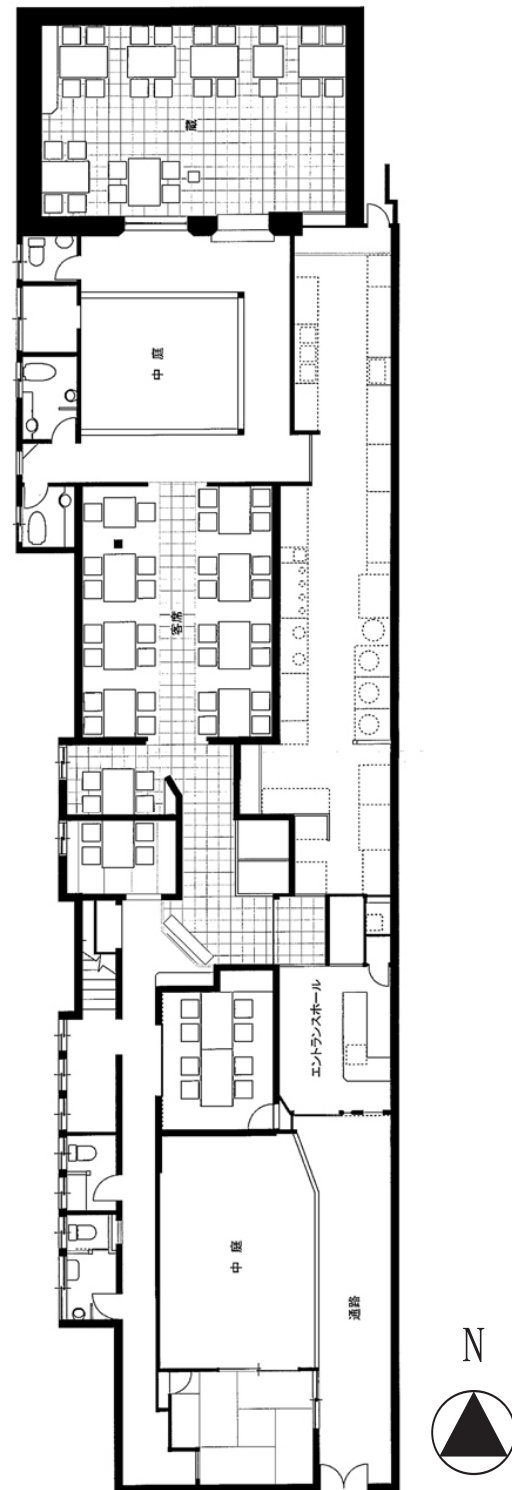
船場地区西部、道修町通に位置する。‘うどんすき’で有名な船場を代表する名店、「美々卯」の道修町店。船場平野町に本店を構える。昭和35年頃に購入し、一部修理してその年の秋から「美々卯道修町店」として営業を始めた。

通りに面して高塀が立ち、奥に中庭、瓦葺木造の主屋、裏手に土蔵が位置する。敷地の形状や建物配置からみると、元は表屋造り(おもてやづくり)の町家であったとみられる。

塀は瓦屋根付きで黒漆喰(しっくい)塗り、下部杉板貼り。入り口部分の庇(ひさし)は棧瓦と銅板葺きである。石畳と砂利敷きの通路が奥の棟に続く。

敷地の西側に延命地蔵尊があり、地蔵盆の際は提灯が飾られる。また、塀前面には緒方洪庵の記念碑が置かれている。

右) 美々卯道修町店の現況平面図
(提供: 株式会社美々卯)



〇〇〇〇さんにお聞きしました!

好きなところ・自慢

この建物は、繊細を免れ焼け残った建物で、その風情を大切にして営業していきたいと思います。



塀をくぐってすぐ左手にある風情のある中庭(道修町店)

歴史やエピソード

(平野町の本店について)

- ・戦災で全焼のあと、戦災被災者に配給された「バラック建物用材料」を亡き父の保険金で購入して建てました。そのムードを今も残しています。
- ・昭和21年1月頃、当時中学1年生の弟がスコップで焼け跡を整地し、建物を建てようとしたところ、占領軍から、軍のテニスコートにするため立退きを命ぜられ整地した上に土を盛りられました。しかしその計画が中止となり、その盛り土の上に建物を建てることになりました。



左・中) 道修町店 蔵・主屋の内部の様子。古い建物の良さを活かし、現在の用途に合わせ大幅に改装している。
右) 平野町にある本店の外観。平成10年9月に改装。

大変なこと

土蔵など、昔の風情を残した活用は手数がかかります。

喜久屋本店



NO. 15

所在地
中央区平野町1-4-7

用途
現在：店舗兼住居

建築年代
昭和初期

備考
設計者不詳

ビジネスマンの憩いの場であった 酒屋

平野橋にほど近い平野町通りに位置する、酒屋「喜久屋本店」。現在も店舗兼居宅として使用されている。

間口いっぱい町家が1棟建ち、裏に庭をもつ。棧瓦葺き、切妻平入り、2階建である。建物の両脇に地上から大屋根の棟より少し高い位置まで、立派な卯建(うだつ)が立ち上がる。1階正面はすべて開口部として改装されており開放的である。2階軒裏は銅板を巻いた箱軒(はこのき)で、建物に存在感を与えている。

庇(ひさし)上の立派な看板が酒屋らしい外観を演出している。



左) 豊富な品揃えを誇る店内の様子。

中) 階段の横に当初から設置されている金庫がある。

右) 金庫の扉は厚く、何重にもなっている。

阪本昭子さん(現当主)にお聞きしました！

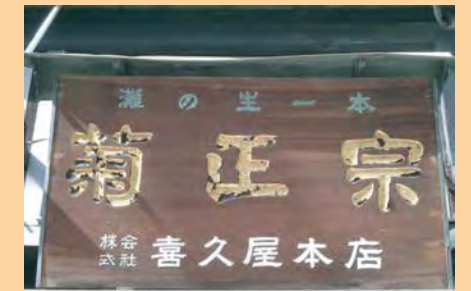
好きなところ・自慢

・昔から市内有数の品揃えや販売数量であったために、酒類メーカーさんに可愛がっていただき、この店のために特別に製作された看板や広告物が多く残っています。特に表の軒上看板はヒノキの一枚もので、今では国産材では製作できないほどの大きさだそうです。

・また、全国で10枚あるかないかの貴重な看板も店内にはございます。時々マニアの方に「お譲りいただけませんか」と言われることもありますが、丁重にお断りしています。

・実は地上3階地下1階です。うだつが大きいのも特徴です。

・裏庭には、商売繁盛を願ってお稲荷さんをお祀りし、今でも毎月1回坐摩神社さんにご祈祷をお願いしています。



上) 庇上の看板

下) 全国で10枚程度の希少な看板

歴史やエピソード

・建築当初は分かりませんが、戦中戦後は統制会社として酒類の流通に関与してきました。昭和28年に法人になり、酒屋としての営業が始まり、現在に至っています。

・近所にたくさんの会社があり、立ち飲み屋をしている時には、三越さん、共同通信社さん、日経新聞社さん、朝日新聞社さんなどの仕事帰りのサラリーマンの皆さんでたいそう賑わっておりました。

大変なこと

・何かと修繕、修繕で、やはり手がかかります。瓦は特別注文です。阪神大震災の際、裏の土蔵に被害があり、残念ですが取り壊しました。



阪口家住宅

No. 16

所在地
中央区平野町1-6-12

用途
現在：住居
当初：弁柄(べんがら)屋

建築年代
明治27年(1894)

備考
設計者不詳

’職住一致’のかつての船場の暮らしを伝える三階建の町家

平野町通りに面する町家。

明治時代に弁柄（べんがら）を扱う商家として建てられた。昭和9年に軒切りにより、表屋が3階建てとなった。現所有者によると、戦後、証券会社が入居しており、当時1階には土間があった。昭和44年ごろ、本建物を購入した際、内部を改装して住居とした。

建物は表屋造り（おもてやづくり）で奥の棟、蔵は当初のまま残っている。



棧瓦葺き、切妻平入り、3階建の町家で、建物両脇に1階の庇から軒下まで卯建（うだつ）が立ち上がる。

1、2階の外壁は黒漆喰（しっくい）塗り、3階は銅板貼りである。2階の庇（ひさし）と屋根の軒裏が銅板貼りの箱軒（はこのき）となっている。

阪口友明さんにお聞きしました！

◆好きなところ

- ・建物も含めて「船場」というまちの環境が好き。利便性はもちろん、昔らしい人同士のお付き合いが残っていて、歴史を感じる。
- ・また、近所に歴史が点在していて、まち巡りが楽しめる。
- ・暮らしながら、木の良さを感じている。木は柔軟性があり、地震にも強いと感じる。阪神大震災のときも、一部瓦が落ちただけだった。

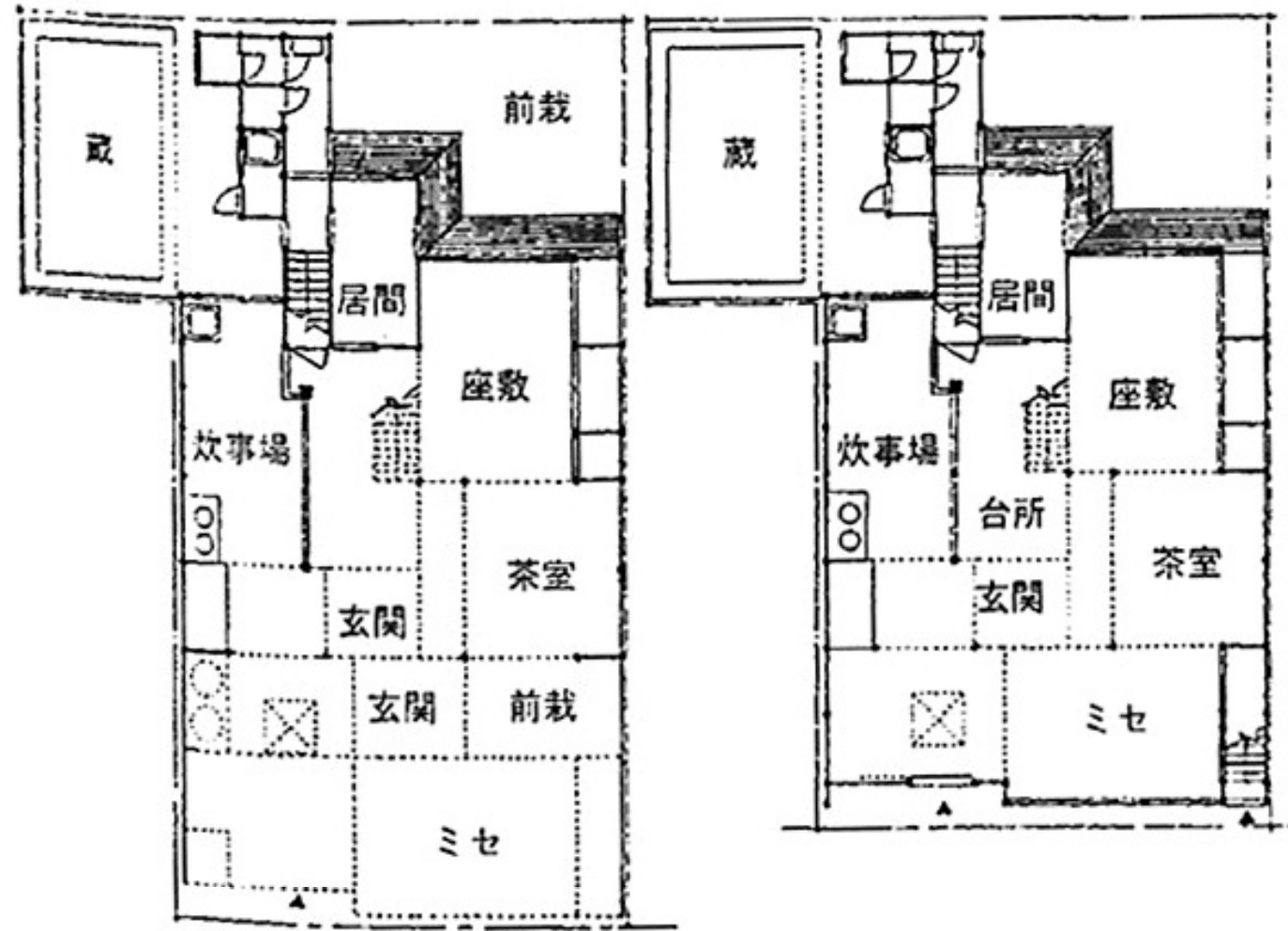
◆歴史のあれこれ

- ・土間には井戸が残っている。床を掘り起こしたら、石畳が現れる。
- ・地下に3畳ほどの倉庫がある。今は使っていないが、入口はある。
- ・裏庭に3階を超える楠があった。
- ・玄関の格子、厚みのあるガラス、きれいな竹の階段手すりは歴史を感じるもので残しておきたかったが、改修工事のときになくしてしまった。
- ・当初は弁柄（べんがら）屋だった。近所にも弁柄屋があったと聞いている。

◆大変なこと

- ・メンテナンス費用がかかること。

平面図



軒切り前1階復原平面図
(聞き取りによる)

軒切り後1階復原平面図
(聞き取りによる)



震災のときに蔵の屋根から落下。鬼瓦は魔よけのために設置されたものなので、現在は玄関に置いている。



NO. 17

所在地
中央区平野町4-2-6

用途
現在：住居
当初：当初：青果商・住居

建築年代
昭和3年(1928)

備考
設計者不詳
国登録有形文化財

空襲から奇跡的に残った三階建町家

昭和3年に、青果商の北野栄太郎が建てた、木造3階建の町家。周辺は戦時中の空襲で大半の建物が消失したが、本建物は奇跡的に残った。

敷地には間口3間奥行6間のコンパクトな町家が1棟建ち、棧瓦葺き、切妻平入り、3階建である。1階庇から軒下まで卯建(うだつ)が付く。

1階の外観は改装されているが、2、3階はタイル貼り、庇、軒裏を銅板で巻いた箱軒(はこのき)となっており、窓枠は銅板で巻かれている。建築時の意匠をよく残している。

建設当時、1階は店舗兼住居、2階は住居、3階は使用人の部屋であった。現在、1階の土間には床が張られているが、2階3階は内部も当時のままである。

建物の両側の卯建、箱軒は防火対策となっており、空襲の際も延焼を防ぐ役割を果たしたと考えられる。



昭和46年4月に米軍が御堂筋を撮影したフィルムに大阪ガスのビル左下に寄り添うように建つ、北野家住宅。

登録文化財に寄せる思い/熊谷真弓子

(2006年2月)

この度、私の実家の北野家住宅が登録文化財に指定されたことは、私はもとより家族一同喜ばしく感じております。戦時中の空襲で大半の建物が焼失した中、我が家だけ奇跡的に残ったことを両親と共に涙したことや、不発ではありましたが焼夷弾に削り取られポツカリ穴の開いた押入れの壁を見て、幼いながらも背筋がゾツとし、言いようのない恐怖感に襲われたことは、今でも私の脳裏に鮮明に焼きついております。また偶然にも、平成4年8月27日の朝日新聞朝刊の一面記事で我が家がポツンと残っている写真を見た時には、当時を思い出すと共に改めてこの家の強運を感じたものでした。とは言いましても、強運なこの建物も時代と共にいつかは朽ち果てていくものと常に不安が付きまわっていました。

- (略) - この家を詳細にご覧になった後、西沢先生(※)から予想外のお言葉をいただきました。「築80年とは思えない程頑丈で、貴重な建物である。- (略) - 一度、登録文化財に申請してみてもはどうですか。」とのことでした。

このことがご縁となり、「登録文化財所有者の会」にも参加させていただくこととなりました。そこでこの家を今後も大切に守っていかねばという使命感を抱くようになりました。

今後この建物をどう生かすか、またそれをどう保存していくかを後世に伝えていくことが、これからの私の務めと思っております。また、当会を通じて会員の皆様と共に、少しでも多くの古き良き時代の面影を広く社会に残していくよう努力するつもりです。(※)西澤英和 当時：京都大学講師・文化財修復学 現在：関西大学教授

～建設当時の面影が随所に残る～

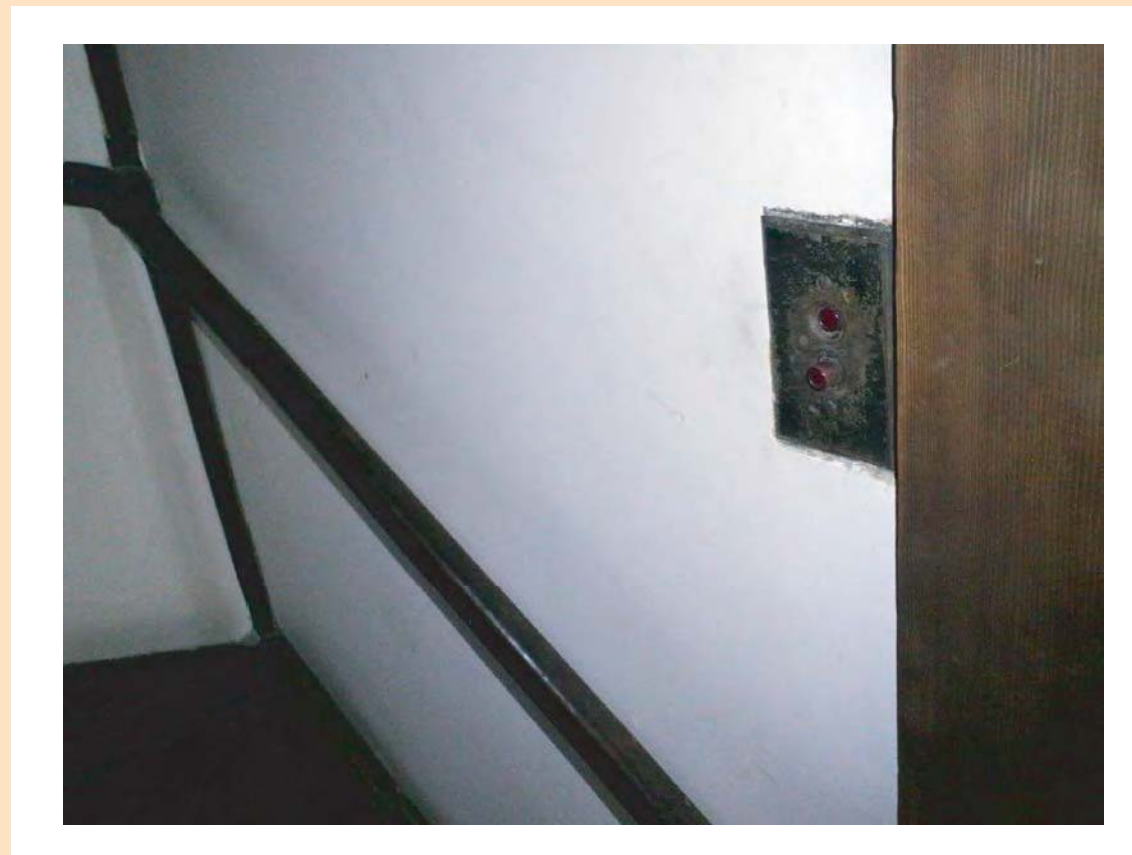
青果商を営んでいた当時に使用していた様々なものが大切に保存されている。



建設当時から残るガラス。当時、ガラスはとても貴重であり、技術的に均一の厚さにならず、波打っているのが特徴。



階段の電気のスイッチ。2つのボタンを押して電気をつけたり消したりする。





御菓子司 高岡福信

No. 18

所在地
中央区道修町4-5-23

用途
現在・当初：店舗

建築年代
昭和15年頃(1940)

備考
設計者不詳

市内最古の和菓子店

伏見町通と魚棚筋の角地に位置するこじんまりとした木造建築。

市内最古の老舗であり、390年余り手造りの味を守り続ける「御菓子司 高岡福信」が店を構える。初代は、大坂城内の寄人として豊臣秀吉公の御膳預りを勤め、その経験を元に、寛永元年（1624）土佐堀船町（現江戸堀）の北船場の地で菓子業を開始、五代目文左衛門の際には京都禁裏の御用を承るなど由緒正しき歴史をもつ。四季折々の生菓子から名物の酒饅頭や鶏卵素麺（たまごそうめん）など、多くの和菓子を扱う。

現在は白い外壁を屋根の上まで立ち上げ洋風の構えをしているが（看板建築）、西側からは瓦屋根をうかがうことができ、昔の姿を留めている。寛永通宝をあしらった看板やひし形の小窓が建物のポイントとなっている。



〇〇〇〇さんにお聞きしました！

好きなところ・自慢

現在では、古い木造の建物が周辺には少なくなって、和菓子の伝統を感じさせる佇まいとなってきた。

歴史やエピソード

- ・昭和44年に当地に移転してきた。
- ・当時はビルも少なく船場に人々が数多く住まわれていたことが懐かしい。



高岡福信の名菓。上記は大阪の特産品（大阪産（もん）名品）に認定されている。